

第 124 回九州医師会総会・医学会

日時：令和 6 年 11 月 17 日（土）13:50～16:00

場所：ホテル日航熊本

参加：田名会長、稲田副会長、大屋常任理事、
玉城常任理事、涌波常任理事、稲富理事

特別講演 I

「柴三郎、鷗外、そして漱石—伝染病の明示を生きた先達—」

熊本大学 名誉教授 小野 友道

要約

この講演では、明治時代の偉人である北里柴三郎、森鷗外、夏目漱石の 3 人と伝染病についてお話があった。明治時代の伝染病、特に天然痘、結核、ペストについての歴史的背景と、これらの人物の貢献が語られた。柴三郎は結核研究で有名で、漱石は文学者としての活動と同時に健康上の問題も抱えていた。北里柴三郎はペスト研究で大きな貢献をした。講演では、当時の医療状況、社会背景、そして現代までの影響についても触れられた。特に、ワクチン開発や公衆衛生の進歩、そして現代の感染症対策への示唆など、幅広いトピックが取り上げられた。

夏目漱石の経歴と健康問題

夏目漱石の経歴が紹介され、特に熊本での生活や健康上の問題について詳しく説明された。漱石が結核を患っていたことや、その診断過程、病状、治療法などが語られた。また彼の作品への影響などが紹介された。

明治時代の伝染病と社会状況

明治時代に流行した伝染病、特に天然痘、結核、ペストについて詳しく説明された。これらの病気が社会に与えた影響や、当時の医療状況についても触れられた。

北里柴三郎のペスト研究

北里柴三郎のペスト研究について詳しく説明された。特に香港でのペスト菌発見や、日本でのペスト対策への貢献が強調された。また、ペストの感染の原因となるネズミ駆除キャンペーンなど、具体的な対策についても言及された。

現代の感染症対策への示唆

講演の最後に、明治時代の感染症対策から学べる現代への示唆について言及されました。特に、ワクチン開発や公衆衛生の重要性、そして新たな感染症への備えについて強調された。

特別講演Ⅱ

「織田信長研究の最前線―「室町幕府の滅亡」と「本能寺の変」―

熊本大学永青文庫研究センター 教授 稲葉 継陽

1

天下統一を進め、その完成目前で倒れた革命者。織田信長ほど国民に共通のイメージで親しまれている歴史上の人物はあるまい。しかし、信長が用いた「天下」という言葉の意味をめぐって、その歴史学上の評価はいま大きく転回している。

現在 20 歳代以上の人々が高校で使用した教科書には、「織田信長の統一事業」として次のような趣旨の記述がある。

信長の「全国統一」は、すでに尾張（現在の愛知県西部）から美濃（同じく岐阜県）までを勢力下に収めた段階から、信長の一貫した政治目標であり、それを象徴するのが、信長が使い始めた「天下布武」の印判であった。信長は全国統一の足掛かりとして永禄 11 年（1568）京都に進出するが、その段階では室町幕府 15 代将軍足利義昭を利用し、刃向かえば切り捨てた。将軍は革命者信長の傀儡でしかなかった。信長に滅ぼされた古い幕府、大名や比叡山などの寺社勢力。そして革命者としての信長。惜しくも本能寺にたおれたが、「統一事業を完成しつつあった」信長の功績を高く評価している。教科書の記述と国民的信長像とはびたりと一致しているのだ。これらを下敷きに作られた小説、映画、ドラマなどの創作では、信長の先進性について、およそ奇想天外ともいえる解釈や演出がなされ、革命者信長のイメージが再生産され続けている。

しかし、冷静に考えると、教科書の記述にも疑問がないわけではない。岐阜県までを統一したに過ぎない時点で全国統一を意味するスローガンを堂々と用い始めるとは、少々早すぎはしないか？近畿・東海・北陸を支配下に入れたに過ぎないのに、しかも東海地方は同盟者の徳川家康の領国であるのに、「統一事業を完成しつつあった」というのは、いささか過大な評価ではないか？九州や東北はどうなるのか？

2

じつはいま、「天下布武」の「天下」が単純に全国を指す表現ではないことが学界の共通理解となり、高校の教科書にもそうした記述が取り入れられつつある。

信長が義昭と上洛した頃、イエズス会の宣教師として著名なルイス・フロイスは、「天下」について本国に次のような説明を書き送っていた（16・7 世紀イエズス会日本報告集）。

日本全土は 66 の国に分かれている…その中で最も主要なものは日本の君主国を構成する五畿内の 5 つの王国である、というのはここに日本全土の首都でもある都があるからである。そして五畿内の君主となるものを天下の主君、即ち日平の君主国の領主と呼び、そのもてる権力と幸運とに合致するだけ、天下の主君である者はその他の国々を従えようとするのである。

諸国大名の統合が成されていないこの時期にあって、「天下」という言葉は、地域的には将軍の統治する「五畿内」（山城、大和、摂津、河内、和泉）、政治的には天下の主宰者としての将軍の権威や権力を指して用いられていたのであった。つまり「天下」とは、幕府依制そのものの謂であった。そうだとすれば、信長は細川氏や三好氏等と同様に、世俗の有力武将が将軍を推戴するという当時のごく当り前のスタイルでもって京

都に進出し、将軍と共に「天下」=五畿内に幕府権力を再興しようとしたまでであって、当時の常識の範囲内で行動したに過ぎなかったということになる。まさに衝撃的な信長像の転回である。

3

信長の革命者たるイメージは、15代も続いた室町幕府を躊躇なく滅亡させたという評価と深く関係している。しかし、義昭と対立した信長がすすんで義昭を京都から追放したわけではなかった。信長は室町幕府を滅ぼすということを既定のプログラムとして京都に出てきたのではなく、逆に、天正元年(1573)の義昭没落直前の最後の段階まで、「義昭と和睦して『天下再興』することが本望である」(細

川家文書)と言い、幕府・将軍の存在にこだわったのだ。将軍没落は信長にとって本来は想定外の事態だった可能性がある。

信長がギリギリまで和睦を追求しているのは、当時の常識では、将軍の伝統的権威があつてこそ「天下」であつたことと関わっている。例えば天皇の即位の儀式には膨大な費用が必要とされたが、その面倒は将軍がすべてみるというのが、室町幕府で定着した朝廷と武家との関係であつた。将軍追放でそうしたシステムも壊れてしまう。いくら世俗の権力を握っていても、将軍ではない信長がそれをやるのはイレギュラーであつた。当時の京都には、そのような伝統的な秩序が厳然と存在したのであつた。

「天下」のために戦争をやめろ、という停戦令を諸国の大名に出すのも、効き目があつたかどうかは別として、「天下の主君」である室町幕府の将軍の専権事項であつた。だが将軍がいなくなった場合であっても、信長は、「天下」のために戦争をやめろ、と言わざるを得ない。そうすると諸国の大名の側から見れば、将軍のいない「天下」とはいったい何だ、ということになる。

信長は結果的に室町幕府を壊してしまったが、それに代わる国家統合のロジックを作れたのだろうか。足利義昭を追放した後、伝統的な将軍の権威を利用することなしに、ひたすら戦線を拡大するという政策に、どのような展望があつたのか。しかし、自らの政治権力を維持し続けるためには、戦争を継続せざるを得なかった。信長は天正8年(1580)に大坂本願寺との戦いに決着を付け、やっと五畿内を平定するに至つたが、その後、60力国の大名たちとどういう支配・従属関係を結ぶのか、いかなる方法を取るのか明確にさせないまま、たった2年後に明智光秀に討たれることになった。諸国

の大名との政治的関係の構築方針をめぐって、織田政権内に路線対立が生じていた。想定外の将軍追放後、新たな統合の体制を構築できないまま戦線を拡大するなど、政治的迷走の結果、織田権力は自らの足元から不協和音が生じて崩れていったのではないだろうか。

4

では義昭の追放後、信長は、自らが将軍に就くというビジョンを持っていなかったのか。じつは信長は「本能寺の変」のひと月前、朝廷から将軍就任を打診されていた。しかし信長はそれにすぐ応えないまま、本能寺に滅びた。

なぜすぐに受けなかったのか。あるいは、なぜもっと早い時期に将軍就任の意向を自ら朝廷に示さなかったのか。私は、将軍に就任する積極的な意思を信長が持たなかった、信長は将軍にはなれなかったと考えている。

それは信長が尾張国の守護代織田氏の有カー族の出身だという事実と関わっていよう。室町幕府の政治体制は、将軍を頂点として、その下に各国の守護大名との関係が整っており、守護大名は京都にいて、各国には守護代を置き、守護代がその国を統治して

いた。信長はそうした身分の出身であった。つまり、室町時代の支配階級の常識の枠組みの中から出てきた人物であった。だから、自分自身が将軍になるという考えは、彼の思考回路の中には存在しなかったのではないか。

5

このように現在の歴史学界においては、古文書等の厳密な検討によって、室町時代の体制のもとで常識的にふるまう信長像が浮かび上がり、インパクトを与えている。

私たちの間にある不動の信長人気は、国民自身の内なる英雄待望意識を示しているように思われる。しかし、戦国の動乱から江戸時代の天下泰平へ、というような歴史の大きな変革は、一人の英雄のドラマチックな業績によって実現されたのではなく、平和実現への様々な社会的動向があつてこそ、なし得たのではないだろうか。そうした観点からの研究がますます必要とされてきている。

教科書が書き換わるほどの信長像の転換。それは、常識を疑うことの重要性をも教えてくれる。疑問の余地なき如き通説も、無理な解釈の積み重ねや思い込み、そしてときには恣意的操作によって構成されていることが少なくない。歴史像は国家の正統性を形づくるものであるだけに、こうした傾向を特に強く帯びる。そうであるからこそ、根拠となる元情報に直接あたり、裏を取り、通説を見直していくという基本姿勢を取り戻す必要がある。「目先の成果を追いかける時代だからこそ、立ち止まってじっくり調べてみろ」。草葉の陰で信長がそう言っているように思われてならない。

以上のことを前提に、当日には、「室町幕府の滅亡」と「本能寺の変」という二大トピックに即して、信長研究の最前線を紹介しよう。